ながやと

渋谷区立長谷戸小学校
令和3年2月号
校長 佐藤 公信

コロナ禍の中の道徳教育

副校長　望月　伸司

道徳は、平成３０年度に、「特別の教科」として教科化され、検定教科書での授業や評価（記述）がスタートしました。授業内容も、「登場人物の心情の読み取り」を重視するものから、「考え、議論する」展開への質的転換が求められるようになりました。

そして、現在、我々が直面している新型コロナウィルスの世界的流行の中で、改めて、道徳教育に関わるいくつかの課題も浮上してきました。

・差別・偏見
・公共の場でのマナー
・考え方の対立、相互不信
・未知のものや不確定なものへの向き合い方

これらの課題は、もちろん以前より大切なものではありましたが、このコロナ禍の中でさらに我々が直面し、向き合わざるを得なくなったものでもあります。目に見えず、実態が分からないウィルスの流行という緊急事態を前に、平常時に我々がもっていたモラルは混乱し、不安定になっています。人間誰しも心に余裕があるときは寛容で優しくなれるものですが、有事の際には、なかなかそうはいきません。しかし、そのような中でも、状況を冷静に判断し、周囲への思いやりをもち、自分に何ができるか考えられる人もいます。人として心から尊敬します。

次に紹介するのは、本校児童が書いた医療従事者の方々への感謝の手紙です。

> 医療従事者の方々へ
> コロナウィルスのかん者さんがたくさんいる中で働いてくださってありがとうございます。少しずつでもかん者さんを治してくださっていることに感謝しています。わたしは、感染者数が増えていることがとても不安です。でも、みなさんがいることで安心感をもつことができます。自分が大変な時でも、みなさんはもっと大変な思いでがん張っていると思って、心のはげみにしています。

日本赤十字社は、新型コロナウィルスのもつ“３つの顔”として、「病気そのもの」「不安と恐れ」「嫌悪・偏見・差別」を挙げています。そして、それらを防ぐ心のもち方として、「気づく力」・「聴く力」・「自分を支える力」を高めること、そして「ねぎらい」・「敬意」の心をもつことが大切だとしています。自分の心の状態に目を向け、社会のために力を尽くしてくれている人々に感謝し、「自分に何ができるか」考えていくことが、今、子供にも大人にも求められています。

本校は、２月１２日(金)に道徳授業地区公開講座を実施いたします（本年度は、授業公開と意見交換会は中止し、校内のみでの授業実施となります)。多様な価値観の時代に「これが正しい考え方です」という絶対の道徳的解答はありません。「自分もみんなも幸せになるにはどうしたらよいか」という自分なりの最適解に向けて、額に汗して真剣に考える子供たちを育てる道徳教育を推進してきたいと思っています。